

近代日本における博覧会の産業振興的意義と役割

－ウィーン万国博覧会を中心に－

戸田清子

はじめに

18世紀末、西欧諸国では内国博覧会が次々と開催されていたが、19世紀に入ると各国で国際博覧会が相次いで開催される。世界最初の国際的博覧会として注目を浴びたのは、嘉永4（1851）年、イギリスのロンドンで開催された「万国の産業の成果の大博覧会」（The Great Exhibition of the Works of Industries of All Nations）であった。以後、フィラデルフィア、シカゴ、パリと、世界の主要都市で万国博が開催され、西欧諸国を中心に、学術・技術の先進性と優越性を競う「博覧会の時代」がスタートする¹⁾。

では、当時の博覧会開催の意義とはどのようなものだったのだろうか。時代や開催国によって、そのテーマは異なるが、近代に開かれた博覧会全般に共通して言えることは、博覧会が産業振興のための宣伝装置であり、政治的装置であったという点であろう。19世紀に開催されたロンドン万国博（1851年）やパリ万国博（1867年）にみられるように、当時の博覧会は、工業技術力の顕示を通じて、輸出市場の拡大を図る産業振興的な役割をもっていた。しかし、そのみならず、学術・技術の面における優越性や卓越性を競い、国際的な優位性を獲得しようとする政治的装置としての意味をも強く内包していたと考えられる。このような流れを受け、わが国においても万国博覧会への参加が重視されるようになった。

自由論題

日本の博覧会の歴史は、江戸時代末期に遡る。わが国の工芸品が初めて出品され、世界に紹介されたのは、文久2（1862）年に開催されたロンドン万国博であった。この博覧会では、日本の漆器・陶器・七宝細工・錦絵など、イギリス初代駐日総領事・ラザフォード・オールコック（Sir Rutherford Alcock）の蒐集による膨大なコレクションが展示され、優れた工芸品の数々は海外から大きな賞賛を浴び、フランスを中心に隆盛したジャポニスム・ブームの先駆けとなる。その5年後、開国まもない慶応3（1867）年、フランス皇帝ナポレオン三世の治世下で開催されたパリ万国博覧会では、江戸幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ独自に参加したが、各自が対等の資格を主張し、統一性と結束性を欠いたものとなった。その後、明治6（1873）年に開催されたウィーン万国博が、日本政府が国家として初めて公式参加した国際博覧会となり、日本も「博覧会の時代」へと踏み出すこととなる。

明治前期、西欧諸国の学術・技術を摂取するために日本が参加した博覧会においては、国威発揚・産業振興といった役割があり、以来、明治期全般を通じて、博覧会は勸業政策の一環としてとらえられてきた。しかし、博覧会の概念は、時代が進むにつれて拡大し、変容していく。大正期から昭和初期にかけては、電鉄会社や百貨店が開催するイベントにも「博覧会」の名称がつけられ、博覧会の概念が拡大されていった。大正13（1924）年の「婚礼博覧会」（宝塚温泉）、大正15（1926）年の「こども博覧会」（東京・上野公園、京都・岡崎公園）や「電気大博覧会」（大阪・天王寺講演）、昭和7（1932）年の「宝塚夫人とこども博覧会」（同）、昭和3（1928）年の「芝居博覧会」（甲子園球場）、昭和11（1936）年の「輝く日本大博覧会」（阪神浜甲子園・阪神パーク・六甲高山植物園）などがその例としてあげられる。

これらのイベントからは、それまで勸業中心であった博覧会の概念が変容し、娯楽に重点を置いた集客装置としての役割を果たすものへと拡大していった過程が読み取れる²⁾。博覧会は、「観る」だけでなく、「遊ぶ」、「楽しむ」といったアミューズメント機能を備えた集客装置として、重要な役割を担うこととなる。女性や子どもに照準を合わせた電鉄会社や百貨店の商業戦略は、新聞社などのメディア戦略と結合し、博覧会はメディアイベントのなかに包

撰されていくようになっていく。そこには、さまざまな可能性を秘めた新しい消費空間として博覧会をとらえ、商業活動に巧みに利用していこうとする意図がみて取れる。

昭和期に入ると、こうした博覧会の商業的機能はさらに高まり、高度経済成長を象徴する祭典として、昭和45(1970)年、大阪で日本万国博覧会が開催される。期間中、およそ6,400万人を動員した千里会場には、数多くの企業パビリオンが建設され、博覧会は大規模な広告宣伝装置としての意味をもつようになる。同時に、期間限定的ではあるが、巨大な祝祭空間として、高度成長に支えられた消費文化を演出する役割を担うことになるのである。その後、「海—その望ましい未来」をテーマにした沖縄国際海洋博覧会(1975年)、「新しい海の文化都市の創造」を謳い、地方博ブームの契機となった神戸ポートピア博覧会(1981年)、国際科学技術博覧会(科学万博つくば、1985年)などが次々に開催され、2005年、「自然の叡智」をテーマに掲げた愛知万博へと、その流れは継承されていく³⁾。以後、膨大な消費空間を演出・創出する集客装置としての博覧会の意義が一層強まっていくこととなる⁴⁾。

けれども、歴史を遡れば、博覧会の本来の意義や目的は、そのような消費文化を演出することではなかった。他国の文物や学術・技術を見比べ、文明とは何かを定義づけ、その進捗の度合いを競い、観客を教化・啓蒙していくところに、その本来の意義があった。

本稿では、明治政府初の公式参加という意味で、わが国の博覧会史の端緒とも言えるウィーン万国博覧会に焦点をあて、近代日本における博覧会の意義と役割について考察したい。

1. ウィーン万国博覧会の概要と賛同目的

(1) 概要

ウィーン万国博覧会は、明治6(1873)年5月1日より10月1日までの半年間にわたり、オーストリアの首都ウィーンで開催された。この博覧会は、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ I 世の治世25周年を記念して計画さ

自由論題

れたものであり、総費用は日本円にして2,200万円という大規模なものであった。ウィーン郊外のプラータ公園を会場に、日本、ドイツ、イタリア、フランス、イギリス、アメリカ合衆国、北欧諸国など二十数カ国が参加して開催され、来場者数は720万人にのぼった。日本からは、織物・漆器・陶磁器・金属細工品・象牙類など多岐にわたる工芸品・軽工業製品が多数出品されたほか、日本庭園・五重塔・金の鯨など、大がかりな出品物や空間展示が施された。西欧諸国の人々を魅了したこれらの展示によるオリエンタリズムへの関心や憧憬は、ジャポニスム隆盛の機運を一気に加速させた。この賛同事業のために明治政府が拠出した費用は60万円にのぼり、政府がいかにかこの事業に意欲を傾けていたかが伺える。

日本政府の参加決定にあたっては次のような経緯があった。明治4(1871)年2月5日(西暦では3月20日)、外務卿・澤宣嘉がオーストリア公使・ヘンリー・ガリッジ氏と会談の際、ウィーン万国博への参加を呼びかけられたことが、その契機である。明治政府はこれに同意し、同年12月、参議・大隈重信、外務大輔・寺島宗則、大蔵大輔・井上馨らが「万国博事務取扱」を命じられ、ウィーン万国博覧会賛同計画が立てられた。明治5(1872)年には、正院中に博物局が創設され、日比谷に開設された博覧会事務局⁵⁾では、大隈重信が事務総裁に、佐野常民が副総裁となって、準備が進められることとなった⁶⁾。

(2) 賛同目的

明治5(1872)年、工部大丞・佐野常民が作成した上申書には、ウィーン万国博賛同の目的が次のように記されている。

第一目的

御國天産人造物ヲ採集選擇シ、其圖説ヲ可要モノハ之ヲ述作シ、諸列品可成丈精良ヲ盡シ、國土之豊饒ト人工之巧妙ヲ以テ御國ノ譽榮ヲ海外ニ揚候様深ク注意可致事

第二目的

各國之列品ト其著説トヲ詳密點見シ、又其品評論説ヲ聞知シ、現今西

洋各國ノ風土物産ト學藝ノ精妙トヲ看取シ、機械妙用ノ工術ヲモ傳習シ勉メテ御國學藝進歩物産蕃殖ノ道ヲ開候様可致事

第三目的

此好機會ヲ以テ御國ニ於テモ學藝進歩ノ爲ニ不可缺ノ博物館ヲ創建シ又博覽會ヲ催ス基礎ヲ可整事

第四目的

御國産ノ名品製造方勉メテ精良ニ至リ廣ク各國ノ稱譽ヲ得彼日用ノ要品トナリテ後來輸出ノ數ヲ増加スル様厚ク注意可致事

第五目的

各國製造産出ノ有名品及其原價賣價等ヲ探搜查明シ又各國ニ於テ闕乏求需スルノ物品ヲ検知シ後來貿易ノ裨益トナル様注意可致事⁷⁾

すなわち、(1) 精良の品を収集・展示し、国土の豊穰と人工の巧妙をもって、わが国の榮譽を海外に示すこと、(2) 各国の出品物と解説を詳細に点検し、西欧諸国の風土物産と学芸を看取し、機械技術を伝習して「學藝進歩物産蕃殖」の道を開くこと、(3) 学芸進歩のうえで欠くことのできない博物館を国内に創設し、国内博覧会を開く基礎を整えること、(4) わが国の製品が各国において日用の精妙なる要品となって、輸出を増加させること、(5) 各国製品の原価や販売価格を調べ、欠乏需要の物品を調査して、今後の貿易上の利益とすること、などである⁸⁾。そこには、海外に日本製品を紹介し、輸出増進を図ること、技術伝習を通じて機械技術を習得すること、さらには、将来に向けて、博物館の創設と国内博覧会開催の基礎をつくることが盛り込まれている。とくに、第三目的に関して言えば、博覧会への参加を、一時的な輸出増進だけをねらった一過性の事業としてではなく、西欧工業技術の移植、国内産業の振興、西欧文明の総合的摂取という側面から、長期的・継続的效果を視野に入れて計画したことが明らかとなろう。

この五つの目的を達成するために、副総裁・佐野常民が着手したことは、まず、「渡航スベキ上下人員ハ能其任ニ堪候者」を選抜すること、「今度御用途ニ必需ノ金額ハ出格御詮議」すること、「主任ノ人御選定撰定ノ上ハ相當

自由論題

ノ權ヲ許有シ其責ニ任ゼシムルベキ事」⁹⁾であった。そこで佐野が「其責ニ任ゼシムル」人物として選んだのが、ドイツ人化学者として来日し、大学南校で教鞭をとっていたワグネル (Gottfried von Wagener, 1831-1892)¹⁰⁾である。ワグネルは来日後、日本の伝統文化や工芸に深い興味を抱くようになり、工芸品の蒐集・研究に従事するようになっていた。明治5 (1872) 年、ワグネルは、ウィーン万国博覧会御用掛の命を受け、明治政府の万国博覧会事業の技術顧問として活動することになる¹¹⁾。この事業は、のちに述べる通り、明治政府が推進していた殖産興業政策の一環として位置づけられ、ワグネルは、この事業の推進に指導的役割を果たすこととなるのである。ワグネルは、出品の採集はもとより、現地に派遣する技術伝習生の指導、西欧諸国の博物館・工作場の視察・調査など、重要な任務を無事に終え、帰国後は、博覧会の詳細な報告書を作成することを佐野から命じられる。明治8 (1875) 年7月、ウィーン万国博事務副総裁・佐野常民によって記された「博覧會報告上呈ノ申牒」には、その趣旨が以下のように述べられている。

抑ワクネル氏ニ囑シテ此書ヲ作ラシムルノ大旨ハ普ク歐州現施ノ日實況ヲ通鑑シテ我國ノ今日ト將來トニ採施スルニ必要ナルノ事業ヲ勸告セシムルニ在リ氏モ亦深ク此意ヲ會シ勉努奮勵筆ヲ援テ休マス精ヲ窮メ處ヲ竭シ取次ニ編成ス夫ノ藝術工業ヨリ以テ教育殖産其他ノ事ニ至ル迄苟モ我國ニ切要有益ナル者ハ織悉漏サス獨リ博覧場ノ所見ノミナラス歐州各國ノ博物館及ヒ工場等ヲ巡視シテ其實蹟ヲ按シ旁ラ諸書ヲ搜リ善ク時宣ヲ斟ミ條析明辯各担当ヲ得タリ臣以爲ラク我國家ノ爲メニ謀ル親切其啓迪ノ功タル洵ニ淺尠ナラスト政府其言ヲ採リ可ナルヲ擇ンテ之ヲ行ハ、國家興利ノ事ニ於テ必ス應ニ裨益スル所アルヘシ¹²⁾

次節では、ワグネルが著わした「澳國博覧會報告書」を中心に、産業振興からみたウィーン万国博の成果について検証したい。

2. 産業振興からみたその成果

(1) 西欧諸国における出品傾向と特色

ウィーン万国博では、出品物の陳列は全部で26の区に分けられ、各国から選りすぐった物品の数々が展示された。鉱山冶金術、化学、食料品、織物類から、金属、機械類、木工製品、陶器、紙、教育器具に至るまで、多種多様な物品が出展されることになり、まさに「百工」を競う祭典として観衆の注目を集め、出品者総数も約7万人¹³⁾にのぼった。この博覧会では、優れた出品に対して、名誉賞、進歩賞などが設けられたことも注目すべき点であろう。ワグネルは、受賞した賞牌の数だけで各国の進歩の度合いが測れるものではないが、「何國何工ニ於テ最モ進歩上達」しているのかを見比べることは、わが国が工業化をめざすうえで有益であると述べている¹⁴⁾。名誉賞と進歩賞を合わせた全体の受賞数で上位を占めるのは、オーストリアとドイツである(表1及び表2)。ここでは、とくに進歩賞に注目したい。進歩賞で注目されるのは、化学百工と織物布帛等の部である。

表1 各国における名誉賞の数

区	部門	オーストリア	イギリス	フランス	ドイツ	イタリア	ロシア	アメリカ合衆国
1	鉱山冶金術	2	1	1	6	1	1	
2	農業山林	6	4	7	9	1	1	1
3	化学百工	1		6	7			
4	食料類似品	8	1	1				
5	織物布帛等	13	3	14	11	5	3	
6	革樹膠	1		3	3		1	
7	金属百工	5	6	8	3	2		
8	木材百工	2	1	3	3	3	1	
9	石硝子陶器	3	2	6	5	2	3	
10	小器物			1	2			
11	紙	3	1	4	5			
12	諸寫術	1	3	2				
13	機械	5	5	6	11		1	
14	知学器具	2	1	5	6	1		1
15	音楽器	3			3			
16	陸軍	2	1	2	4		2	
17	海軍	2		1	2		2	1
18	建築土巧	6		6	4	2		
26	教育器具	4	1	2	13	2		4
	計	69	30	78	97	19	15	7

「奥國博覧會報告書」(土屋喬雄編『G.ワグネル 維新産業建設論策集成』北陸館、1944年)、125-127頁より作成。

表2 各国における進歩賞の数

区	部門	オーストリア	イギリス	フランス	ドイツ	イタリア	ロシア	アメリカ合衆国
1	鉱山冶金術	19	1	7	19	8	8	1
2	農業山林	52	11	29	41	7	9	4
3	化学百工	20	11	26	43	8	4	2
4	食料類似品	75	18	44	55	32	15	7
5	織物布帛等	136	35	143	99	36	27	3
6	革樹膠	8	5	14	13	3	5	1
7	金属百工	57	18	32	64	2	8	4
8	木材百工	16		8	11	1		2
9	石硝子陶器	31	5	15	12	7	2	
10	小器物	45	1	26	24	4	4	
11	紙	11	3	7	12	1	2	2
12	諸寫術	29	4	31	34	6	7	7
13	機械	51	36	39	73	3	7	25
14	知学器具	20	4	20	14	5	3	2
15	音楽器	21	2	10	15	3	2	2
16	陸軍	10	2	6	13	3	3	2
17	海軍	7	1	4	2	2	4	
18	建築士巧	25	5	31	23	11	4	
26	教育器具	39	1	21	35	8	6	6
	計	672	163	513	602	150	120	70

「澳國博覽會報告書」(土屋喬雄編「G.ワグネル 維新産業建設論叢集成」北陸館、1944年)、125-127頁より作成。

まず、化学百工ではドイツの躍進がめざましい。ワグネルの「澳國博覽會報告書」によれば、化学百工の部で「最モ觀客ノ感ヲ取シ者」として賞賛を浴びたのは、アニリン¹⁵⁾を原料とした合成染料である。このアニリンを使った染料は色彩的にも美しいとされ、フランス、ドイツ、スイスなどの国々では、アニリンを用いた新發明によって多くの褒賞を得た。ワグネルは化学工業の重要性を説き、硫酸曹達などの製造に関し、化学薬品の製法上の改正進歩は「緊急ノ要件ニシテ工業經濟上ノ形勢ヲ一變スル」ほど重要なものであるとして、日本においても早急に化学工業を興し、化学品製造に着手すべきであると述べている¹⁶⁾。

織物布帛等において受賞数が群を抜いているのは、フランス、オーストリア、ドイツである。織物については、「全區中最モ宏大ナリ」とあるようにフランスの受賞数が抜きんでている¹⁷⁾。ワグネルの報告書によれば、フランスにおいてはリヨンを中心に、中世からの伝統的産業である絹織物の品質の良さが高く評価されている。木綿・毛織物などにおける紡績技術の向上もめざましく、これらの先進工業技術を移植することが日本の軽工業を牽引す

るうえで重要であると指摘している。また、主催国のオーストリアから出品された繊維製品も「甚タ美観」であると賞賛し、同国出品の「ジウト」¹⁸⁾製品にも関心を注いでいる。さらに、金属細工の部では「澳英兩國」の出品が「甚タ美観」であると述べている。

金属細工の部では、オーストリア、ドイツ、フランスの受賞数が多いが、ワグネルはとりわけ、フランスの銀器メーカーであるクリストフル社¹⁹⁾に注目し、金属加工のなかでも、日本の伝統工芸である七宝を用いたクリストフル社の製品について、「其巧妙ヲ極メリ」と絶賛している。石硝子陶器の部では、オーストリア、フランス、ドイツが多く、イギリスがそれに続いている。ワグネルは、「此區ニ属スル磁器又他ノ類似粧飾物品ニ於テハ佛英最モ拔群ニシテ既ニ前博覧會後大進歩ノ實効ヲ顯セリ」と述べ、イギリスのミントン社の製品についても高い評価を与えている。また、食料類似品の部でオーストリアの受賞数が多いのは、「果實及ヒ肉類保蔵物」の出品が多いためであり、ワイン、ソーセージなどの食品製造法が「切要ナル百工」と評価された結果である。

織物、機械に比較すれば受賞数は少ないが、鉱山冶金術の部におけるドイツの発展も注目すべきであろう。ドイツはイギリスに遅れて工業化を果たした後発工業国であるが、18世紀に産業革命を経験したイギリス工業化の先進モデルとその成果を模倣することで工業化に成功した。試行錯誤をせず、最短の時間と最少の労力によって工業化を成功させたという点で、「後発の有利性」(Advantage of backwardness)が働いた結果であると言える。ドイツにおいては、ウィーン万国博の20年前、1850年から1910年代にかけて鉱工業生産額が増大し、金属・化学工業などの重工業がめざましい発展を遂げている²⁰⁾。鉱山冶金術、化学部門における多数の褒賞が、このようなドイツの重化学工業を中心とした工業発展を反映したものであることは言うまでもない。ウィーン万国博開催の時期が、そのようなドイツ工業化の躍進期と重なっている点も、ここでは指摘しておきたい。

以上、表1・表2からは、次のような点を指摘することができよう。

(イ) 西欧先進諸国においては、鉱山冶金・金属加工・化学・繊維工業など

自由論題

における発展がめざましく、それら近代工業の発展にともなって発達した技術が、高い評価を得ていること。

- (ロ) 工業技術の卓越性のみならず、織物やガラス、陶器など、装飾性が重視される分野においては「美麗ナルモノ」、つまり、工芸品としての芸術性も評価基準になっていること。
- (ハ) 受賞国としては、オーストリア・フランス・ドイツ・イギリスなどの西欧工業国が多数を占めており、それらの国々はすでに工業化を達成している国、あるいは工業化を達成しつつある国であること。

(2) 日本の出品傾向と特色

では、日本の出品に関しては、どのような傾向がみられたのだろうか。日本の出品内容は、表3の通りであり、伝統工芸品、軽工業製品がその大部分を占めていることが明らかである。精巧な機械製品を出品するには、工業技術力が未発達な段階にあり、輸出増進をめざして海外市場を開拓するには、織物・

表3 ウィーン万国博における日本の出品物

品名	細目	品名	細目
生糸	山繭生糸	彫刻物	色々
織物類	縮緬・羽二重・錦・絹・紗・天鷲絨・紙布・葛布等	画	古画新画色々・錦画色々・油画色々
縫箱物		団扇	色々
組物		紙類	色々
漆器	書棚・料紙箱・香炉臺	蠟	色々
磁器	花瓶・植木鉢・大皿	礦物	金・銀・銅・鉄・鉛・錫などを含む鉱石色々・石炭・泥炭・硫黄各種、此外色々
銅器	花瓶	宝石化石類	
玉臺		動物	鳥類・魚類・介蟲類・蛇類
七宝	指輪類各種・花瓶・陶器七宝を彫せし「コーヒー」器類各種	植物	茶・穀物類・果実類・食用品種物・海草類・葉種類・葉烟草・糸ニ製スル草木ノ皮・丸太材・樹皮・板類・革ヲナメス木皮・染料ノ草木、色々
竹器	手提類・菓子入類・虫籠・鳥籠	巨大物品	金鯰・鎌倉大佛紙ノ張抜・東京谷中天王寺五重塔雛形・大太鼓・大挑灯一対
藤細工	花籠一対・手提類・巻烟草入		
象牙細工	筆筒・筆立		
鼈甲細工	黒鼈甲鳥籠・同蟲籠		
鯨骨細工	巻烟草入		
革	革細工色々・手筆筒・文庫		
水晶細工	水晶玉色々、此外色々		
瑪瑙	緒メ類色々		

「澳國博覽會贊同記要」、上篇、1897年（『明治前期産業発達史資料』明治文献資料刊行会、1964年、復刻）26-34頁より作成

漆器・陶器・金属細工品・竹細工品・紙など、在来産業として発展してきた伝統工芸の分野で技術力を競うほかに方法がなかったことが読み取れる。

出品物の採集に関しては、政府は早くから準備を進めていたものの、「到底主意貫徹シ難キ」状況となり、「物品多産ノ地方」へ博覧会事務局員を派遣した。同時に、東京においては、「古道具商及製造人等」から新旧の漆器、その他、

小さな物品に至るまで、出品可能なものを蒐集し、点検を行った。また、新たな物品の製造にあたっては、「後來輸出ノ目的アル物品ニシテ其職業拔群ナル者」を選び、本局に呼び出した²¹⁾。表4からは、京都の織物・陶器、佐賀・愛知の磁器・七宝をはじめとして、全国各地の伝統産業から生み出される工芸品・特産品が出品対象として重視されていたことが分かる。博覧会事務局は、優れた伝統の技をもつ工匠たちを集めて物品製造にあたらせるほか、職工を管理する職工長らには優れた出品物の製造を奨励し、「良品ヲ製出セシメング爲物價ノ外金五圓前後」の月給を支払った。また、出品物の鑑定については、東京府下在住の工匠たちに「月給拾圓」を付与して漆器鑑定を依頼した²²⁾。

では、これらの出品物は、ウィーン万国博で実際にどのような評価を得たのだろうか。日本製品に対する海外の評価を示すものとして、次に、日本の出品物受賞数について検討を加えたい。

表5は、日本の出品物受賞数を部門別に表わしたものである。日本の出品物のうち、最も受賞数が多かった部門は、衣服・織物の部であり、次いで、漆器、紙、金属細工、陶器・硝子器などである。そのうち、衣服・織物の部の受賞は52であり、受賞数全体の26%を占めている。生糸では勸工寮や富

表4 産地別蒐集品

産地	出品内容
京都	織物・陶器
佐賀	磁器
愛知	磁器・七宝焼
滋賀(水口)	籐細工
有馬(兵庫)	竹細工
静岡	寄木・竹細工
石川	九谷焼陶器・銅器
高岡	銅器
広島	薩摩焼
桐生(栃木)	織物

〔澳國博覧會贊同記要〕、上篇、1897年（『明治前期産業発達史資料』明治文献資料刊行会、1964年、複製）14・15頁より作成

自由論題

岡製糸場からの出品物が、また織物では、京都の絹織物や小倉の綿織物が進歩賞を受賞している。その他、長野・福島・筑摩産の生糸や、東京・茨城・鳥取・和歌山産の織物類が、有功賞・雅致賞などを受賞している。とくに、日本の絹織物は海外において高い評価を得て、後のフィラデルフィア万国博において出品を果たしていることも、ここではつけ加えておきたい²³⁾。

工業製品について言えば、日本はまだ近代工業の発展をみない工業化の初期段階であり、いわゆる近代工業技術を誇示するような出

品物は見あたらない。「機械ノ事術ニ於テ未熟」なわが国では、職工が製造できる品々も「手細工ノ小器品」に過ぎないが、古来、名品と称される特産品が数多くあり、それらは国際競争力をもち得る輸出品として評価できるとしている²⁴⁾。受賞数最多を記録した衣服・織物の部においても、生糸などの一次産品や伝統的な在来技術による織物などが受賞対象となり、手工業・軽工業製品の域を出ていない。しかしながら、上記(ロ)で指摘した伝統工芸品としての芸術性や美しさ、品質の良さという点においては、日本の物品も西欧諸国の品々に優るとも劣らず、大きな注目を集めたことが明らかとなろう。また、受賞数は織物に及ばないが、漆器については、「歐人我蒔繪ヲ見テ其美術ニ驚キ始メテ我邦ノ文明ヲ識認(ママ)シタル者アリ」として、海外からの関心が集中した。博覧会会場で初めて日本の漆器を見た欧米人が感嘆し、「古蒔繪ノ硯箱等ヲ争テ之ヲ求メント」殺到し、漆器に対する人気が高まったことが伺える。その後、一時的ではあるが、漆器の輸出も増大した²⁵⁾。

表5 日本の受賞数

区	部門	数
1	鉱山製鉄	1
2	農具	5
4	食用品	14
5	衣服・織物	52
6	皮樹膠	3
7	金銀・銅鉄細工	17
8	木具・竹細工	27
9	陶器・硝子器	17
10	細小品	23
11	紙	21
12	画書	2
14	学問上ノ器械	2
17	陸軍	3
20	田舎家屋	2
23	神祭具	1
26	教育	1
	貿易	3
	草木培養	8

「澳國博覧會贊同記要」、上篇、1897年（『明治前期産業発達史資料』明治文献資料刊行会、1964年、復刻）附録、11-17頁より作成

また、紙では、「日本製紙ハ博覧會ニ於テ大ニ人ヲ感動セシメタリ」、「其元品實ニ優美ヲ極メタリ」とあるように、その美しさや品質が評価され、「需要スル紙ノ元品充分ニシテ其價適當ナルヲ得バ必ス輸出ノ一物タルヲ得ベシ」²⁶⁾とあり、安定生産のもとで、適切な価格で輸出できるのであれば、将来、強力な輸出品となることが指摘されている。紙の製法については、博覧会終了後、ワグネルの指導により、欧州各国の学校や作業場で技術伝習に携わった伝習生の一人、石井範忠が「製紙法」を学び、次のように述べている。

紙ハ我國名産ノ一ニシテ其用甚ダ廣シ博覧會ニ列シテ萬國ノ公評ニ附シ殆ト將ニ名譽ノ賞牌ヲ得ントスルニ至レリ其質美ニシテ尤モ強ク若シ之ヲ改良セバ内外普通ノ良品タルベシソノ改ムベキハ紙面毛起シテ鐵筆ヲ用フルニ適セズ種類ニヨリテハ價值モ亦頗ル高貴ナルニ在リ²⁷⁾

これによれば、石井は、西欧の製紙法によって日本の紙に改良を加えれば、一般的普及品として品質も良くなるとしたうえで、改良すべき点が和紙の起毛性にあることを指摘している。そこで彼は、平らで滑らかな紙質に改良するため、日本製品をフランクフルトに送り、試作品をつくった。その成果があったので、オーストリアの「シュレーグルミュレ」製紙場に派遣され、技術伝習を行ったと記録されている²⁸⁾。石井は、「我國産ノ樹木製紙ニ適スルモノ多シ」と、日本の自然風土が製紙業に適していることをあげ、「此法ヲ以テ常用ノ厚紙粗紙等ヲ製シ國益ヲ興サシメンコトヲ期望ス」と、製紙法における技術革新が国際競争力をもたらし、日本製紙の輸出増進につながると述べている。

このようにして、産業振興・輸出増進という目的をもって、日本政府は工芸品や特産品を出品し、西欧工業技術の移植策としては、技術伝習という方法がとられた。明治政府の目標である殖産興業政策推進の柱として重視されたものは、西欧工業技術の移植、国内産業の育成と振興、輸出増進などであったが、輸出増進を図るうえでまず重要なことは、国内産業の育成・振興である。博覧会における出品物がいかに「瞬間的に」人々を感嘆させ、一時

自由論題

的な輸出増進を果たしても、それが伝統工芸品、軽工業製品の域に留まっているかぎり、近代工業技術を駆使した西欧の工業製品にかなうはずがない。将来的に、わが国が貿易における優位性を得るためには、西欧の先進技術や制度を移植することが急務であるが、そのためにはまず、西欧諸国の学術・技術をよく視て、比較することから始めなければならない。それには、短期的・限定的な展示空間である博覧会から、長期的・恒常的な展示空間である博物館へと、学術・技術の摂取の場を拡大していくことが必要となる。そこで、ウィーン万国博賛同の第三目的に掲げられた博物館構想が重要性をおびてくる。佐野常民は、期間を限定して開催される博覧会の「短期的・瞬間的」効果の限界をあらかじめ予測し、「長期的・継続的」効果をもたらす博物館へと構想を広げている。それは、ウィーン万国博参加がもたらす成果を一過性のものに終わらせず、発展性や持続性を付与していくことでもある。佐野は、博物館という装置を創設することで、その成果を発展させ、将来へと繋ぐ構想を立てたのである。このようにして、博物館は、国内外の学術・技術を「視る」、「調べる」、「比べる」ことが常時可能な文化的・社会的装置として、殖産興業政策のなかに組み込まれていくことになる。

3. 博覧会から博物館へ

(1) 佐野常民の博物館創設構想

では、佐野が示した博物館構想とは、具体的にどのようなものだったのだろうか。「澳國博覧會賛同記要」に収められた佐野の「博物館創立ノ報告書」には、次のような一文がある。

博物館ノ主旨ハ眼目の數ニヨリテ人ノ智巧技藝ヲ開進セシムルニ或リ夫人心ノ事物ニ觸レ其感動識別ヲ生スルハ眼視ノ力ニ由ル者多ク且大ナリトス國ノ言語相異ナリ人ノ情意相通ヒサル者モ手様ニ以テスレハ其大概ヲ解知スヘク物ノ妍媸美醜ヲ別チテ愛憎好惡ノ情ヲ發スルト其形質體狀ニヨリテ製式用法ヲ了會スルト齊ク眼視ノ力ニ頼ラサルナシ古人云フア

リ百聞一見ニ如カスト人智ヲ開キ工藝ヲ進マシムルノ最捷經最易方ハ此
 眼目ノ数ニ在ルノミ是即チ近時歐洲各國争テ博物館ヲ建設シ宇内萬邦ノ
 珍器要品ヲ展列シ人民ノ縦覽ニ供シ、²⁹⁾

この報告書によれば、佐野は、博物館の主旨が「眼目の數」によって、「智巧藝術ヲ開進セシムル」ところにあるとしたうえで、「人智ヲ開キ工藝ヲ進マシムル」ための最短最易な方法は、この「眼目ノ數」にあり、近年、西欧諸国が先を争って博物館を建設し、珍しい品々、必要な品々を陳列し、国民に見せるのは、「智巧藝術ヲ開進」することを教導、鼓舞するためであると述べている。その背景には、イギリスのサウス・ケンジントン博物館³⁰⁾の存在があげられる。冒頭に述べたように、イギリスは嘉永4（1851）年、世界初の万国博覧会を開催するが、その際に出展された物品は「其製品ノ形状風致杏ニ他邦ニ劣ル」ものであった。そこで、イギリスは「之ガ爲メ大ニ激勵」して、「其知見ヲ博クシ互ニ其技能ヲ研クノ緊要ナルヲ發明」し、この大博覧会で得た収益と政府の出資によって、サウス・ケンジントン博物館を創設した。そして、その本館には、「知學藝術ヲ教フル學校」も併設され、「其裨益ノ洪大ナル効驗ノ旺盛ナル斯ノ如シ」とあるように、博物館・工芸学校の創設が大きな成果を生み出したことが述べられている。その具体的な例として、佐野は、この後、「英國所製ノ物品」が「各國ニ超過」し、「十二年間ニシテ輸出ノ額其藝術ニ係ルモノ幾ンド四億五千萬弗ヲ増シ」たことを指摘している。博物館・工芸学校の創設がもたらしたその大きな効果に、「各國之ニ驚歎シテ止マズ争テ其制ニ倣フ所ナリ」として、佐野は、サウス・ケンジントン博物館を、工業技術力の増強を図る一つのモデル・ケースとして高く評価している³¹⁾。

佐野は続けて言う。「英ノ陶器佛ノ七寶荷ノ漆器」などは、もともとわが国の伝統工芸品を模倣したにすぎなかったが、イタリアの製糸などは「其精巧ヲ極メタリ」と評価されるほど、今では品質が向上している。他方、わが国の現状を見れば、外国製品を模倣して西欧諸国を追い抜くことも、もはや困難である。「至便至益ノ機械」を利用するにも、国内においては「未ダ會テ

自由論題

見ザル者」がいるような状況である。その隘路を切り拓くには、博物館の建設が必要であり、サウス・ケンジントン博物館は、日本の現状において、最も適したモデルであると評価している。ここで指摘されているのは、博物館に各国の優れた物品を多数蒐集することによって、比較・選別の眼を養うことであり、同時に、先進的な産業技術・工芸技術を摂取することである。そのためには、博物館の建設に留まらず、工芸学校を併設することが重要であると佐野は述べている。佐野は、サウス・ケンジントン博物館が工芸学校を併設したように、日本においても博物館に「術業傳習場」を設置することを提言している。佐野の構想によれば、この伝習場は二科に分かれ、一つの学科では、「畫圖彫鏤刊刻造型」等の諸術を学ばせ、もう一つの学科では、「化學上及機械上ノ工藝」を学ばせる。さらには、博物館で必要となる「畫圖模型寫眞」の作成や、陳列されている器械を使用しての物品製造も学習内容に盛り込み、職工や工学を志す学生の技術伝習を奨励している³²⁾。

ここで佐野が言うところの術業が「技術」をさすことは言うまでもないが、その伝習については、美術・芸術の領域に関わる「工芸」と、化学・機械製造に関わる「工業」の両方が必要であることが読み取れる。漆器・陶磁器・七宝など、伝統的工芸品におけるわが国の技術は、海外に誇れる水準の高いものであり、その習得や伝承が大切である一方、近代工業技術の習得なしには、西欧諸国に比肩するような工業化は達成できない。したがって、伝統工芸部門と近代工業部門という、二つの系統の技術を柱に、わが国は工業化を図っていくべきだと考えられていたことが明らかとなろう。このような佐野の構想は、この後、伝統工芸部門では、ワグネルを中心とした中等技術教育³³⁾へ、また、近代工業部門では、イギリス人・ヘンリー・ダイアーを中心とした高等技術教育³⁴⁾へと発展・深化していき、わが国における工業教育の拡充が図られることとなる。ウィーン万国博の目的の一つに技術伝習があげられていたことはすでに述べたが、このような意味において、ウィーン万国博における技術伝習は、技術というものを、学校教育制度のなかで組織的・体系的に学ぶことの必要性を、わが国が認識する重要な契機となったということが出来る³⁵⁾。

佐野はこのように博物館創設の必要性を提言し、博覧会という、芸術品や工業製品を一時的に展示する期間限定的な非日常的空間から、学術・技術を恒常的に摂取することが可能な日常的空間である博物館へと、西欧文明の摂取空間を移行させ、定着させていくことの重要性を示唆した。佐野は、「夫博覧會ハ博物館ト其主旨ヲ同クスルモノ」であり、「實ニ國家富殖ノ源人物開明ノ基トス之ヲ要スルニ大博覧會ハ博物館ヲ擴充拓張シ之ヲ一時ニ施行スルニ過ギズ故ニ常ニ相須チテ相離レザルモノタリ」³⁶⁾と述べ、博覧会を開催することの利点を、以下のように挙げている。

すなわち、(1)「天下ノ所産」を一度に見られること、(2)博覧会開催によって国民が「奮然興起」し、「其技術ヲ研精改良」すること、(3)「未ダ會テ見知セザル」物品とその利用方法を知ること、(4)「内外ノ物品ヲ比較シ互ニ其得失良否」を察し、「短ヲ捨て長ヲ取」り、「舊ヲ變ジテ新ニ換へ」、「其術ヲ琢磨シ其製ヲ鍊熟シ」することによって、国家の利益となること、(5)「今日ノ必要ノモノ」は「機械ノ術」であり、外国人が出品する器械類によって機械製造技術に道を開く機会が得られること、(6)「外人ヲシテ我國ノ所産ヲ觀テ或ハ交換シ或ハ購買シ或ハ他日ニ囑需」することによって、「信息ヲ將來ニ通ジ」、その利便を図ること、(7)輸出額を増やすこと、(8)「物品中適要ナル者ヲ撰」んで、博物館本館・支館に陳列すること、(9)「各國土壤ノ肥瘦物産ノ異同多寡」を知ること、(10)「其風俗ノ美惡」を察し、「開化の優劣」を観ること、などである³⁷⁾。

このことから、博覧会開催においては、国内外の珍しい物品や先進技術を単に「観る」、あるいは「知る」だけではなく、それらをよく「比較」することによって自国の技術を「磨く」こと、さらには、貿易を通じて諸外国との信頼を深めることも重要な目的であると考えられていたことが読み取れる。博覧会事業が産業振興のうえで、きわめて重要な役割をもつと考えられていたことが分かるが、同時に、近代国家をめざすうえで、博覧会が民衆教導の装置として位置づけられていたことも明らかとなる³⁸⁾。

(2) ワグネルの「藝術及百工上藝術博物館ニ付テノ報告」

博物館の創設については、ワグネルもまた、その必要性を強く認識していた。『G. ワグネル傳』の中に収められた「藝術及百工上藝術博物館ニ付テノ報告」で、ワグネルは「博物館ハ單ニ藝術物品ヲ蒐集整列スルノミナラズ又藝術家ヲ激勵振起シ此館ヲ利用シ且ツ此簡便ノ法ヲ以テ後輩ニ諭セシ教授ニ因テ益スル所」³⁹⁾と認識し、博物館が単なる芸術品の展示空間ではなく、技能・技術を伝承し、教授するという教育的側面をもつ空間であることを主張している。

ワグネルは、「本國百工藝術」を進めるといふようなことは到底、短期間ではなし得ないことであり、その達成のために「採用スベキ一般ノ方法」として、佐野と同じく、「眼目ノ教育」が必要であると説いている。その内容は次の通りである。

- (イ) 形貌ノ華美ナル修飾ノ雅致ナル或ハ工術ノ巧ミナルトニ依リテ撰擇セル百工藝術上新故産物ノ蒐集
- (ロ) 藝術上物品ノ好き見本又模範及ビ格法トナスニ堪ユル圖書、寫眞、及ビ書籍等ノ蒐集又此ト同ク良好ノ格法ヨリ寫シ或ハ圖書ニ倣ヒ「ジプサム」ニテ造成シタル塑型ヲ備フル亦極メテ要用ナリ而シテ(イ)ニ記セル陳列物ノ中ニ於テ須ク此ヲ製スベシ
- (ハ) 陶器匠、青銅鑪工、七寶細工等ノ如キ諸職業ノ爲メ精擇セル模法ノ圖書ヲ公示シ且ツ之ニ明白ナル解説及ビ精細ノ記説ヲ加フベシ
- (ニ) 殊特ノ學校ニ於テ百工模範ノ爲メ圖學ヲ教育スベシ其學校ノ主旨ハ久シク精密ニ勤經驗シタル人ノ熟練ト學門トニ助ニ頼テ日本藝術傳來ノ良能ヲ保維シ工匠ヲシテ之ニ慣レシメ又不拔ノ基根ヲ發殖セントスルニアリ
- (ホ) 舊新ノ諸物産品ヲ蒐集シ一時博覽會ヲ整頓シ又加フルニ名譽ノ章ヲ受ケタル現在ノ工匠及ビ藝術家ノ發明創成セル新作品及ビ圖書等ノ博覽會ヲ開キ相互ニ優劣ヲ比競セシムベシ
- (ハ) 日本工匠及ビ藝術家ノ爲メ緊要ノ報吾ヲナスニ堪ユベキ工藝其他ノ旨

趣ヲ論説スルー小冊ヲ公布スベシ⁴⁰⁾

ワグネルはここでまず、形状の美しさや技の卓越性を基準に選ばれた「百工藝術上新故産物」を蒐集すること、「藝術上物品ノ好キ見本又模範及ビ格法トナス」ことに堪えるような図絵・写真・書物などを集めること、或いは、ジブサム（石膏）でつくった模型を備えることが必要であると述べている。また、陶器・金属細工・七宝などの技術を習得するために、陳列物には、その出品物をより正確に理解できるように「模倣ノ圖書」を提示し、「明白ナル解説及ビ精細ノ記説」をつけることが望ましいと指摘している。さらには、西欧諸国の進んだ工芸技術を学ぶには特別な学校が必要であり、「精密ニ勤勉経験シタル人ノ熟練ト學問」、つまり、実践的技術の習得と理論的学習とによって、日本の伝統的な技術・技能を身につけることが工芸技術の確固たる基礎をつくり、発展させることにつながると述べている。また、ワグネルは、日本国内で博覧会を開催し、工匠や芸術家による作品を出展し、互いにその優劣を競わせることを提案している。ワグネルがここで最も強調したかったことは、佐野が重視した「眼目の教育」である。優れたもの、質の良いものを蒐集し、できるだけ多くの作品を「視る」こと、本物を蒐集することが難しければ、図版や書物などの資料によって正確に模写した石膏のモデルをつくること、さらには、「視る」という行為を補完するものとして、図解や詳細な解説を作品に添えることを提案している。すなわち、「視る」、「理解する」という経験を重ねることによって、芸術品・工芸品の優劣を見極める能力を養うことができると考えていたことが看取できる。また、諸外国の例をあげて、優れた工芸家を養成するためには工芸学校の設置が必要であり、技能を競わせる博覧会を開催することを視野に入れていることが読み取れる。

すなわち、ワグネルの提唱する「眼目の教育」とは佐野のそれと同様に、「視る」、「理解する」だけではなく、その理論を「学ぶ」ための教育の場を設けること、さまざまな作品を「比較」することによって優劣を見極める眼を養うこと、そして、国内博覧会の開催を通じて技術・技能を「競う」というこ

とまで視野に入れたものであることが明らかとなろう。今後、工芸技術の発展に役立つような論説をまとめた解説書を出版すべきである点にもふれていることも指摘しておきたい。

ワグネルは、以上の点をふまえて、芸術博物館構想を展開している。その目的は、「日本物産ノ市場ヲ擴大シ正實ノ利ヲ生ゼンガ」ために「本國百工藝術ヲ發起スル」¹¹⁾こと、すなわち、国際競争力をもつ商品として日本の工芸品を輸出し、海外における市場拡大を図ることであり、そのためには、内外の物品を多く見比べて眼力を養うことが不可欠であることが示されている。以上のことから、博物館の創設は、明治期のわが国において、きわめて重要な意味をもっていたことが明らかとなろう。

4. 工業化における博覧会の意義と役割

ウィーン万国博以降、国内における博覧会事業は、大別すると、次の二つの道へと分化していく。一つは、内国勸業博覧会であり、共進会である。国内産業を育成し、生産技術を競い合うこれらの催しは、機械や工業製品の展示を通じて、近代日本の技術革新を内外に広める、いわば産業振興のPR装置として機能していく。また、もう一つは、博物館の創設である。ワグネルがめざした芸術博物館構想は、東京職工学校校長となる手島精一の手によって、教育博物館として具体化していく。「眼目の数」を重ねる空間という意味においては、博覧会と博物館はいずれも、相互に「常ニ相須テ離レサル」存在であるということができるが、その根底にあるのは本稿で論じてきた通り、工業化推進のための殖産興業政策であった。また、さらにそれは、世界のなかで、政治的・経済的な優位性を得るために技術力を競い合う「競技の空間」としての意味をも包含する。

では、その技術力を、明治前期の日本は何をもって判断し得たのだろうか。最後に、工業化推進の側面から博覧会の意義と役割について考察したい。

すでにふれたように、後発国が工業化を図る場合、先発工業国が提示するモデルを模倣し、その方法・成果を摂取することによって、試行錯誤を繰り返す。

返すことなく、効率的な工業化政策を進めることができる。ウィーン万国博覧会が開催された時期は、ドイツがイギリスを追い上げ、工業化の躍進期を迎えつつあった時期でもあった。ドイツの場合は、イギリス製の機械や技術の模倣・改良するという追跡努力だけではなく、独自の産業分野、例えば、金属生産、金属加工、化学工業などが19世紀以降、めざましい発展を遂げたことが工業化の成功要因であった。その背景として、産業技術の蓄積、技術教育の拡充、都市機能の集積など、工業化を図るうえで必要とされる基盤が整備されていたことが指摘される。言い換えれば、それらの基盤整備によって、後発工業国ドイツと先進工業国イギリスとの技術格差は、「追いつける」程度のものであったといえることができる。つまり、そこに「後発の有利性」を発揮する素地が存在したと考えることができよう。

では、日本の場合はどうであったか。結論を言えば、日本もまた、「後発の有利性」によって、急速な工業化・近代化を果たした。近代工業技術を導入するための中央集権的政治機能だけではなく、識字率の高さ、在来産業の成熟、都市機能の集積など、いわゆる「江戸時代の遺産」が明治期の工業化・近代化を下支えしたことは周知のことである。結果的には、これらの基盤のうえに、殖産興業政策が推し進められ、きわめて短期間のうちに工業化を達成したことになる。しかし、明治初期においては、日本はまだ、自国と西欧諸国との技術格差を正確に把握する術を有してはいなかった。西欧諸国と同レベルの技術水準に到達し、工業化を達成するには、どの程度の努力と時間を要するのかを、わが国は短期間で判断する必要があったのである。そのためにはまず、自国の技術水準を客観的に把握することが重要となる。博覧会は、諸外国の技術水準を知り、自国との技術格差が埋められる程度のものか否か、「後発の有利性」を利用できる範囲であるのかを判断する場でもあったのである。

では、どのように判断するのか。それは、西欧諸国がすでに開発した技術や工業製品を見比べることから始まる。そこで必要となるのが、佐野やワグネルが指摘した「眼目の数」である。工業化推進のためには、西欧諸国の先進工業技術をつぶさに「視る」こと、どの分野でどの国の技術が優れている

自由論題

のかを徹底的に「比較」すること、そして、最も導入が容易な、あるいは困難な技術は何かを見極め、どの国のどの技術・機械を導入すべきなのかを的確に「選別」することが重要であった。それらの作業を通じて初めて、日本は、西欧諸国との技術格差が「追いつける」程度の格差なのか否かを明らかにすることができたのである。したがって、博覧会は、わが国の技術水準を客観的・総合的に判断するための、「訓練の場」であったとすることができる。ウィーン万国博への参加を通じて、技術導入の重要性を認識した明治政府は、これ以降、工業技術の国産化を図るために工業教育機関を拡充し、技術者養成にも積極的に取り組んでいくことになる。

おわりに

博覧会は、西欧社会を俯瞰し、「未ダ會テ見知ラザル」学術・技術を摂取するという意味において、近代をまなざす空間であると同時に、日本という国に諸外国のまなざしが注がれる空間であることを意味する。そこで重視されるのは、「眼視の力」である。まなざしを注ぐ側では、博覧会において眼目の数を増やすことを通じて比較・選別の能力を高め、他方、まなざしを注がれる側としては、博覧会は、外部からの眼目によって、容赦なく比較・選別される試練の場となる。吉見俊哉によれば、明治期の日本には、これに加えて、西欧社会を俯瞰する自らのまなざしを、逆にその周縁部からまなざすという意味が加わり、博覧会という装置が創出する重層的なまなざしのなかで、自国のアイデンティティを形成してきたとすることができる。近代において、日本は、西欧社会に対しては、東洋のエキゾティシズムを強調し、西欧社会が望むような非近代のイメージを自ら創出してきた。他方、アジア諸国に対しては、日清・日露戦争を機に、帝国主義的なアジアの盟主としてのイメージを次第に誇示していく。吉見は、非近代を装いながら、他方では「欧米列強」に比肩する近代国家の優越性を誇示していくという二重の自己を指摘し、その二面性が、西欧社会をまなざす自らの姿を、さらにアジアという周縁部からまなざしているという、まなざしの重層化をつくり出していると

論じている⁴²⁾。そうした二面性が生み出す矛盾は、日本がアジアの国でありながら、西欧社会から受容され、認知されることを切望した結果であろう。日本が果たした近代化とは工業化であり、摂取すべき制度・学術・技術がことごとく、先進西欧諸国から移植されたという点においては、わが国の近代化＝西欧化であることは論をまたない。

日本の博覧会は、明治前期、西欧社会への憧憬に始まり、西欧に受容されんがために、ジャポニズムを強調した自己を演出し、明治後期以降、植民地政策が進むにつれて、帝国主義的な色彩を帯びていく。日清・日露戦争の勝利によって植民地政策を拡大させ、資本主義国家として発展しつつあった近代後期、日本の博覧会はもはや、ウィーン万国博にみるような眼目の数で西欧社会の学術・技術を習得していく文化的・社会的装置ではなく、アジアの盟主としての自己を、「後進」の植民地表象を通じて確認する政治的装置と化していく。明治後期、帝国主義的な近代化を推進していく過程で、日本の博覧会は、その近代性を、学術・技術を尺度として測るのではなく、「後進」であることを強いられた植民地との距離感によって確認し、国内外に示していく装置となる⁴³⁾。そのような意味において、近代日本における博覧会の歴史は、「脱亜入欧」政策が内包する矛盾を具現化したものとみることができる。

近代における博覧会は、外側からは、まなざしを注がれる「試練の場」として存在し、内側からは、世界の文物に対するまなざしを磨く「訓練の場」として存在した。さらにそれは、〈西欧社会〉対〈非西欧社会〉という構図のなかで、近代に向かって矛盾する二重の自己を表出していく場でもあった。いずれにせよ、博覧会は「眼視の力」の重要性を強く認識する場であり、近代を可視化する政治的・文化的装置として重要な役割を担っていたということが出来る。そのような意味において、本稿で考察したウィーン万国博は、わが国が博覧会を、近代への新しいまなざしの空間として認知していく契機となったというべきであろう。

[注]

- 1) 万国博覧会と日本の工芸品に関する研究については、拙稿「万国博覧会と産業振興—明治期における『工芸』と工業化をめぐる考察—」(奈良県立大学『研

- 究季報』第18巻、第3・4合併号、2008年3月、所収)に詳しく述べている。
- 2)このような集客装置としての博覧会の機能については、拙稿「阪神間モダニズムの形成と地域文化の創造」(奈良県立大学『研究季報』第19巻、第4号「地域創造学研究Ⅱ 特集:住宅都市の創造→阪神間を事例として」2009年3月、所収)で取り上げ、論じている。
 - 3)橋爪紳也「博覧会はどこへ?—1970年代以降、21世紀の動向を見る」(橋爪紳也監修『日本の博覧会』平凡社、2005年、208頁)。
 - 4)博覧会が、観光振興・産業振興を図る集客装置としての役割をもつことには変わりはないが、近年では、その集客機能を高める要素として、「驚き」や「共感」が付加されてきている。これらは、単に対象を「観る」だけではなく、「触れる」、「体験する」、「交流する」ことを通じて得られる感情であり、未知なるもの、驚きや発見を与えてくれるものへの期待感が、博覧会という空間に求められていることを物語っている。それは、来場者が展示物を「観る」という、情報へのファースト・コンタクトで満足し得た時代から、出展者と来場者が展示物を通じてなにがしかの「交流」を行い、相互理解を深め合う時代へと、博覧会の性格が変容しつつあることを示唆している(長谷川里江「ディスプレイってご存じですか?—博覧会とディスプレイ業の一世紀—」、同上書、115頁)。展示物を「観る」だけでなく、「体験する」、「遊ぶ」、「学ぶ」、「楽しむ」、「食べる」といったさまざまな要素が盛り込まれているのが、現在の博覧会空間であろう。国際的なイベントという意味においては、オリンピックと同様に、国家の威信や民族の祭典といった政治的装置としての役割も包含するが、アミューズメントの要素をふんだんに包含し、効果的な集客装置として観光振興・産業振興に大きな役割を果たしているところに、現在の博覧会の存在意義があるといえる。博覧会は、回遊し、佇み、「鑑賞」して満足する受動的空間から、自らが主体的に楽しみ、対象に問いかけ、積極的に「驚き」を体験する能動的空間へと変容を遂げつつある。
 - 5)後に、山下門内に移設している(「澳國博覽會賛同記要」上篇、10頁。1897年、『明治前期産業発達史資料』明治文献資料刊行会、1964年、復刻。以下、「澳國博覽會賛同記要」と記す)。
 - 6)「澳國博覽會賛同記要」、上篇、2頁
 - 7)「澳國博覽會賛同記要」、上篇、11-12頁
 - 8)吉見俊哉『博物館の政治学』中央公論新社、1992年、117頁、及び三好信浩『明治のエンジニア教育』中央公論社、1983年、113-114頁
 - 9)「澳國博覽會賛同記要」、上篇、13頁
 - 10)ワグネルの工芸教育については、拙稿「万国博覧会と産業振興—明治期における『工芸』と工業化をめぐる考察—」(奈良県立大学『研究季報』第18巻、第3・4合併号、2008年3月、所収)にその詳細を論じている。
 - 11)ウィーン万国博覧会におけるワグネルの担当業務は、「列品並物品出所

- 取調技術指導」であった。このとき、政府に雇用された外国人は6名（オーストリア人3名、ドイツ人はワグネルを含む3名）であったが、ワグネル以外は、外人応接、通訳・編集、売店通訳などの担当であり、出品の手配や技術指導を全面的に委ねた佐野常民のワグネルへの信頼の深さが伺える（『G.ワグネル小傳』、土屋喬雄編『G.ワグネル 維新産業建設論策集成』、北陸館、1944年、27頁）。
- 12) G.ワグネル「澳國博覧會報告書」（土屋喬雄編『G.ワグネル 維新産業建設論策集成』、北陸館、1944年、114頁。以下、「澳國博覧會報告書」と記す）。及び、三好信浩『近代日本産業啓蒙家の研究』風間書房、1995年、213頁
 - 13) G.ワグネル「澳國博覧會報告書」124頁
 - 14) 「賞牌ノ數ヲ以テ其國開化ノ程度ヲ測ル準本トナスヘカラサルハ固ヨリ論ヲ俟タズト雖モ然レトモ名譽賞状ハ何國何工ニ於テ最モ進歩上達セシヤヲ徴スルニ足ルヲ以テ亦利益ナシトセサルナリ」同上書、128頁
 - 15) アニリン (aniline) とは無色透明の可燃性液体で、染料・ゴムなどの化学製品、農業・医薬品製造の際に用いる化合物である。ワグネルは、「『アニリン』色ト稱スル極テ美麗ナル諸色ナリ此染料ハ石炭蒸留ノ時生スル物産中ヨリ出ツル者ニシテ近世化學上最モ顯著ナル製造物トス」と述べ、この化合物の重要性を指摘している（同上書、129頁）。
 - 16) 同上書、95頁及び、172-175頁
 - 17) 同上書、129頁
 - 18) ジュート。麻の一種である黄麻のこと。オーストリアでは、この黄麻を東インドから輸入し、帆布などの粗布の製造に用いたとされたとあり、本博覧会では、ウィーン郊外で黄麻製品を大規模に製造する工場から出品されたと記されている（同上書、130頁）。
 - 19) Christofle社。1830年創立のフランスの最高級銀器メーカー。洗練されたデザインのカタラー、フォトフレームなどは日本でも人気が高い。
 - 20) ドイツではこの時期、鉱山・金属生産・金属加工・化学など重化学工業を中心とした生産財生産の優先的発展がみられた。鉱工業生産額は1850-1913年の間に約11倍に増大し、第一次部門から第二次部門へと産業構造が変化した。とくに鉱工業の成長率はめざましく、鉱工業生産の高成長がドイツ工業化を牽引していたことは明らかである（岡田泰男『西洋経済史』八千代出版、1997年、159-161頁）。
 - 21) 「澳國博覧會賛同記要」、上篇、14頁、及び國雄行『博覧会の時代—明治政府の博覧会製政策—』33頁。
 - 22) 「澳國博覧會賛同記要」上篇、14-15頁
 - 23) 同上書、下篇、191頁
 - 24) 生糸・織物・茶・漆器・磁器・銅器・七宝・竹器・彫刻物・紙・蠟・革・刀剣などがあげられ、主要輸出品として重視されている（同上書、上篇、25頁）。

自由論題

- 25) 同上書、下篇、192頁
- 26) G. ワグネル「澳國博覽會報告書」132頁
- 27) 「澳國博覽會賛同記要」下篇、20頁
- 28) 同上書、20頁
- 29) 「澳國博覽會賛同記要」中篇、4頁
- 30) 現在のヴィクトリア&アルバート博物館 (Victoria and Albert Museum) をさす。ロンドン万国博覧会の収益をもとに、1852年、産業博物館として創設。1857年の移転にともない、サウス・ケンジントン博物館と改称。その後、現在の名称に改められる。
- 31) 「澳國博覽會賛同記要」、中篇、5-6頁
- 32) 同上書、中篇、7頁
- 33) 明治7 (1874) 年2月、ワグネルの建議によって、東京開成学校に制作学教場が開設される。その主旨は、職工長や現場に携わる中級技術者の養成を目的としたものである。設置の目的として「百工技術の促進の急務」が掲げられているように、この制作学教場は、開成学校における速成的教育機関として開設された (拙稿「明治前期における中等工業教育の展開—開成学校制作学教場を中心に—」奈良県立大学『研究季報』第18巻、第1・2合併号、2007年10月、所収)。
- 34) 明治6 (1873) 年、上級技術者養成を目的として工部大学校が開校され、本格的な工業教育機関としてスタートする。理論と実践の両面を教育特色として打ち出したこの教育機関は御雇外国人教師、ヘンリー・ダイアー (Henry Dyer, 1848-1918) の考案によるものである (拙稿「工部大学校における技術教育—その『自立化』過程をめぐる考察」(奈良県立大学『研究季報』第17巻、第3,4合併号、2007年3月、所収)。
- 35) 三好信浩『明治のエンジニア教育—日本とイギリスの違い—』中公新書、1983年、119頁
- 36) 「澳國博覽會賛同紀要」、中篇、8頁
- 37) 同上書、中篇、8-9頁
- 38) 吉見俊哉『博覧会の政治学—まなざしの近代—』中央公論新社、1992年、121頁
- 39) 土屋喬雄編、前掲書、9頁
- 40) 同上書、4-6頁
- 41) 同上書、7頁
- 42) 吉見俊哉、前掲書、260頁
- 43) 同上書、208-214頁、及び、大橋庸子「博覧会と近代日本の自画像・世界像」(橋爪紳也監修、前掲書、218-219頁)

[参考文献]

- 伊藤真美子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年
植田豊橋編『ワグネル傳』博覧會出版協會、1925年
「澳國博覧會賛同記要」1897年（『明治前期産業發達史資料』明治文献資料刊行会、1964年、復刻）
岡田泰男『西洋經濟史』八千代出版、1997年
國 雄行『博覧会の時代－明治政府の博覧会政策－』岩田書院、2005年
久米邦武編『米欧回覽実記』五、岩波書店、1985年
国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第9巻、産業教育1、国立教育研究所、1973年
新保博『近代日本經濟史－パックス・ブリタニカのなかの日本的市場經濟－』創文社、1995年
土屋喬雄編『G.ワグネル 維新産業建設論策集成』北陸館、1944年
戸田清子「明治前期における中等工業教育の展開－開成学校制作学教場を中心に－」（奈良県立大学『研究季報』第18巻、第1・2合併号、2007年3月、所収）
戸田清子「工部大学校における技術教育－その『自立化』過程をめぐる考察」（奈良県立大学『研究季報』第17巻、第3,4合併号、2007年3月、所収）
戸田清子「万国博覧会と産業振興－明治期における『工芸』と工業化をめぐる考察－」（奈良県立大学『研究季報』第18巻、第3・4合併号、2008年3月、所収）
戸田清子「阪神間モダニズムの形成と地域文化の創造」（奈良県立大学『研究季報』第19巻、第4号「地域創造学研究Ⅱ 特集：住宅都市の創造－阪神間を事例として－」、2009年3月、所収）
中岡哲郎『日本近代技術の形成』、朝日新聞社、2006年
中岡哲郎・鈴木淳・堤一郎・宮地正人編『産業技術史』、山川出版社、2001年
野呂栄太郎『日本資本主義發達史』（上・下）岩波書店、1997年
橋爪紳也監修『日本の博覧会』平凡社、2005年
樋田豊次郎『明治の輸出工芸図案－起立工商会社の歴史－』、京都書院、1998年
三好信浩『近代日本産業啓蒙家の研究』風間書房、1995年
三好信浩『日本工業教育成立史の研究－近代日本の工業化と教育－』風間書房、1979年
三好信浩『日本工業教育發達史の研究』風間書房、2005年
三好信浩『明治のエンジニア教育－日本とイギリスの違い－』中公新書、1983年
三和良一・原朗編『近現代日本經濟史要覽』東京大学出版会、2007年
吉見俊哉『博覧会の政治学－まなざしの近代－』中央公論新社、1992年